

小田原市文化振興ビジョン策定検討委員会 第5回会議概要

1 日 時：平成23年12月21日（水） 10：00～12：40

2 場 所：小田原市役所 大会議室（7階）

3 出席者

(1) 委員（10名）

石塚委員長、間瀬副委員長、鬼木委員、杉崎委員、露木委員、平井委員、
岩城委員、大森委員、神馬委員、山口委員
（欠席：桧森委員）

(2) 行政（6名）

諸星文化部長、奥津文化部副部長、古矢文化芸術担当課長、杉本文化政策係長、
福井主査、瀬戸主任

4 傍聴者：5名

5 概 要（議事）

(1) ビジョンの素案について

【石塚委員長】

- ・前回の検討を踏まえ、事務局でビジョンの素案をまとめていただいた。本日が最後の会議となるので、委員会としての最終案を固めていきたい。
- ・事務局から、前回会議で指摘を受けて修正したところを中心に説明いただきたい。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・資料2及び資料3は、ビジョンの体系を示した図。資料2は目次のようなものとして概要を説明したものであり、資料3は立体的なイメージとして第3章の最後に加えられないかと考えている。資料4は前回会議でのご意見をどこに反映させたかを示す一覧であり、資料5は目次の修正前後の対照表。さらに、参考として用語集を作成し、掲載した語句については、本文中に「※」印をつけている。
- ・大きく変わった点として、第1章に「はじめに」を追加した。大森委員がおっしゃったように、危機感を持って自分のこととして捉えていただくために、策定に向けての宣言のような形で入れている。
- ・第1章で特にご確認いただきたいのは、目指すまちの姿を「幸福感を持って住み続けることのできるまち」とし、具体的な説明として「コミュニティの絆が結ばれ、ブランド都市として評価されている状態」とした点。また、文化と人とまちの関係

を、7ページのイメージ図に示した。

- ・第2章は、それぞれの項目に現状と解決の糸口になる考え方を文章で記載した。問題が複合的であり優先順位がつけにくいことから、各項目には数字をつけていない。また、行政の体制が十分でなかったという項目を追加した。
- ・第3章に示した3つの基本目標については、これで良いか確認をお願いしたい。事業例は、「想定」から「実践」へとやや力を入れた言い方にした。
- ・第4章は、「策定検討委員会からの提言」とし、来年度、市民を交えた形で検討していきたいと考えている。

【石塚委員長】

- ・今回も章立てに沿って検討していく。最終回となるため、委員からの意見は、できるだけこの場で解決していきたい。事務局からも、随時発言していただきたい。
- ・まずは第1章について検討したい。

【鬼木委員】

- ・言葉の追加や修正について数点。
- ・1ページの「私たちはより深く小田原のまちの一員であることを自覚し、自治の主役であるという認識が深まっていきます。」の部分に、「小田原を愛する」という言葉を加えたい。一員であることの誇りに加え、愛情も入れてほしい。
- ・2ページの「芸術のもたらす想像力は、創造力の源となり、行動を起こす力になります。」の「想像力」を「自由な想像力」に。想像力が、なぜ生み出す力である創造力につながるかの説明になる。
- ・4ページに「文化や芸術が人を惹きつけるのは、それ自体が楽しいことだからであり、」とあるが、「楽しいこと」ばかりではない。時にはびっくりすることもあり、必ずしも心地良く感じるとは限らないが、それでも惹きつけられるのである。文化の持つ非日常性や、自身の感性を超えるものが人を惹きつける。そのような表現が盛り込めないだろうか。
- ・ビジョンの中心概念として「幸福感を持って住み続けることができるまち」とあるが、まちと人はセットとなるのではないか。長くなってしまうが、ビジョン全体の記載やこれまでの議論を踏まえて、例えば「本物志向の人」とか「志を持つ人」といった、人に関するものをここに加える。まちだけでなく、人についても触れておきたい。

【平井委員】

- ・前回の会議は欠席してしまったのだが、「幸福感を持って住み続けることができるまち」という部分は、どの時点で確定したのか。「幸福感」という言葉には違和感がある。
- ・現在、母校である東京大学社会科学研究所の「希望学プロジェクト」に参加してい

る。福井県を対象とするものであり、幸福度調査において北陸三県は常にトップクラスだが、県や県内自治体の意識としては、県民はそれほど幸福を感じていないということである。福井県は人口の減少が顕著であり、県内の高校を卒業した人の3割は県外に出て戻って来ない。一昨年から調査をしており、高校生の学力は全国でもトップクラスだが、目的意識と将来展望が他と比べて顕著に欠けていることが分かってきた。

- ・このプロジェクトで「希望」という言葉を使っているのは、「幸福」は現状を守るという今の視点の言葉であるのに対し、「希望」は現状を変えて将来を切り拓いていくという未来志向の言葉だからである。将来への見通しが重要であり、誇りや幸福感も、将来への見通しをもたらすものとして位置付けられないか。
- ・「住み続ける」という表現も、外から人が入ってくる、新しい人を惹きつけるといった視点がなく、現在の住民が良ければ満足と感じてしまう。この点でも、検討の余地がある。

【山口委員】

- ・「3. 文化振興ビジョンは何を目指すのか」で「幸福感を持って住み続けることができるまち」が出てくるのは唐突すぎる。また、第1章から第3章までの各章の相互の関連がつかみにくい。
- ・「2. 文化振興の意義とは何か」と「3. 文化振興ビジョンは何を目指すのか」とが並列という印象を受ける。7ページの図で、人の「自分と向き合う」と「人と人を結びつける」は「2.」に、「コミュニティの形成」は「3.」に記載されており、まちの「経済の活性化」と「特色ある地域づくり」は「2.」に、「都市ブランドの構築」は「3.」に記載されていることから、並列のように感じるので、表現のまとめ方の工夫を。この結果、中心概念となるはずの「3.」の迫力が弱くなってしまっている。
- ・「はじめに」と「あいさつ」の両方でビジョン策定の目的を述べているが、両者の意味合いに微妙なずれを感じる。

【間瀬副委員長】

- ・第1章の役割は問題提起と現状分析であり、内容に関して異論はない。
- ・しいて言えば、言葉が固いので柔らかくすべき。芸術が「既成概念を破壊する」というのは表現としてきつい。また、市民生活を「平板な生活」と言っているが、「日常生活」に置き換えたほうが良い。全体的に、文言が一人歩きしているイメージがある。

【石塚委員長】

- ・「はじめに」の「長引く景気の低迷と広がる格差、先行き不透明な社会、孤独感や疎外感、誇りや自尊感情の欠如など、さまざまな不安が、未来への展望を暗いもの

にしています。」について。景気が良くなれば社会が良くなるというわけではないので、その認識を再度整理していただきたい。バブル崩壊後は「失われた 20 年」と言われ、リーマンショック以降さらに先進諸国は低迷している。日本では少子高齢化と人口減少により、かつて経験したことのない時代に突入している。一方で、世界の人口は増え続け、地球規模での資源不足に陥っている。このような文化的バックグラウンドを書いておくべき。

- ・日本の財政再建は非常に難しい。このような中では、市民ができる限り自立できるようにすることが施策の中心となってくる。このことを認識として書いていただきたい。
- ・1 ページに「そして、こうした文化は、ある特定の社会集団の構成員によって共有されるものです。自分の属する集団と違う文化は『異文化』と認識され、私たちが他の誰でもなく『私たち』であると区別する意識は、文化の違いで強められます。」とあるが、この解説がかえって文化の解釈を混乱させており、不要ではないかと思う。文化は、人間の創り出した営みである。
- ・今までの問題提起に対して、事務局の意見を伺いたい。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・平井委員の指摘された点について、「幸福感を持って住み続けることができるまち」は、当初は「文化の力で未来を拓く」としていたが、これまでの委員の皆さんのご発言から「幸福感」と「住みたいまち」が重要であると感じ、変えさせていただいた。排他的、停滞的になることは避けたい。「住み続ける」には、「離れてもまた戻って来たい」、「住んでいなくても何らかの形で関わり続けたい」といった意味も含めている。まちは楔ではなく根である。
- ・何を目指すかは、読む人に共感していただきたいところなので、さらにご意見をいただきたい。例えば、「希望を持った人たちが幸せに暮らすまち」といった言い方もできる。

【石塚委員長】

- ・この部分について、他の委員はどのように考えるか。

【岩城委員】

- ・何が幸福かは人によって異なるので、「幸福感」という言葉は、分かるようで分からないものである。
- ・二宮尊徳先生の研究には、「郷土」や「ふるさと」という言葉が出てくる。第 1 章には「まち」や「都市ブランド」という言葉があり、新しい劇場や作品など、未来に向けて新しいものを作ろうとするイメージがあるが、一方で、道祖神や壊れかけた古いものなど、土着のものイメージが欠けている。農業・林業・漁業まで含めたビジョンとするのなら、「郷土」という言葉を使いたい。

- ・「3. 文化振興ビジョンは何を目指すのか」の1行目の「幸福感を持って住み続けることができるまち」もカッコで括り、太字にすべき。
- ・平井委員の「希望」、鬼木委員の「志を持つ人」は、ビジョンが目指す小田原の姿を考える基準となる。

【石塚委員長】

- ・「幸福感」と「希望」はほとんど同義だが、現状か未来かという点で違いがある。平井委員からのご指摘のとおり、「希望と誇りを持って暮らせるまち」といった表現にしてはどうか。

【杉崎委員】

- ・アート活動をしている若い方が、「これから生きていくのに、何もない。先が見えない。」と話していた。20歳代、30歳代の若い人達に対して、まちの中に未来が見えるものを何か提案できると良い。
- ・全国的に人口が減少している中で20万都市を維持するためには、若い人が出て行かず、逆に外から人が来るまちにしていかなければならない。私自身も、アートイベントを通して小田原はおもしろいということを伝えたい。夢のある、具体的なものを示していきたい。

【石塚委員長】

- ・静岡県三島市に隣接する長泉町では人口が増えている。行政には、人口は減る一方ではなく、やり方によっては増えるという認識を持って仕事をしていただきたい。

【杉崎委員】

- ・小田原には海、川、山、里があり、これだけ揃っているまちは全国的にも少ない。小田原は資源のまちだと認識すれば、皆が希望を持つ。これらの資源を皆で活かそうという動きが生まれ、そこに若い人達が加わってくれれば良い。資源があること自体が幸福なのである。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・杉崎委員の指摘された資源に関しては、第2章に「小田原の宝」として記載した。
- ・「はじめに」で将来への夢や希望を持つことも幸福の重要な要因であるということを書いており、そこから先もこのことを前提として書き進めてしまっていた。「3.」の部分で再度、「幸福」と「夢」、「希望」、「未来」といった言葉とのつながりが分かるような書き方に修正していきたい。

【鬼木委員】

- ・「幸福」という言葉自体は悪くないが、「幸福」と「住み続ける」が続くと、現状維持という印象になる。
- ・「未来の幸福」という言い方もできる。持続可能性の意味を込めて「未来の幸福を生み出し続ける」とし、「まち」とせずに「未来への幸福を生み出し続けます」と

してはどうか。

- ・人とまちが一体となって、文化の力で将来にわたる幸福感を創っていこうという表現にしたい。

【神馬委員】

- ・今が幸福だと感じることも必要。「いつか幸せになる」と思っているだけでは満たされない。今の幸せを実感し、さらに、これからもっと幸せになっていくという期待が込められると良い。

【平井委員】

- ・専門家達は、今の若者は幸福感を持っていると主張している。上の世代からは大変だろうと思われている一方で、本人達は幸せだと感じている。しかし、食べるのに困らないが将来は分からないという意識があり、未来への希望や展望を欠いている状態である。
- ・豊かさとは何かという問いに対し、元来は働かずに済むことや食べるのに困らないことだと思われ続けてきたが、1970年代以降はその意識が変わってきている。今この時期になぜビジョンを策定するのかと考えると、どちらかと言えば今よりも未来への展望に重点を置いたほうが良いのではないかと思う。

【石塚委員長】

- ・目指すまちの姿については、ここまでの議論を踏まえて再度事務局で整理していただきたい。
- ・続いて、第2章について伺いたい。

【岩城委員】

- ・「地域コミュニティの再生」の項目に「少子高齢化や核家族化による担い手不足」とあるが、これは何の担い手か。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・自治会、子供会の役員や地域のボランティア活動の担い手。地域活動に参加し、コミュニティ形成の中心となる人が不足している現状を踏まえている。

【岩城委員】

- ・露木委員のような、芸術文化の担い手は含まないのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・含まない。ここでは地域コミュニティについて記載している。

【平井委員】

- ・「少子高齢化や核家族化、ライフスタイルや価値観の多様化など、近年の社会環境の変化に伴い、地域コミュニティが衰退しています。」とすれば良いのではないか。

【鬼木委員】

- ・「1. 小田原の宝は何か」の各項目に、少し説明を入れたほうが良い気がする。ビジ

ョンは様々な場面で読まれるものであり、新しく来た人が小田原を知るきっかけとなる可能性もある。例えば、小田原駅に入っている路線名や富士箱根伊豆国立公園の範囲など。

【石塚委員長】

- ・これについて、事務局はいかがか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・ご意見があれば反映していく。先程杉崎委員がおっしゃったような、すばらしい宝があるところに住んでいることも幸せの一つだということも含め、文で表記することは可能。

【平井委員】

- ・文の他に、資源マップのように一目で分かる地図のようなものも提案したい。

【岩城委員】

- ・「行政の文化に対する取り組み」は、正直で良いと思った。

【山口委員】

- ・「行政の文化に対する取り組み」というタイトルは曖昧なので、もっと踏み込んだ表現にしても良いのでは。「取組体制を強化する」や「方式を再編成する」といった、一歩進んだ表現とすると分かりやすい。

【平井委員】

- ・第2章と第3章の役割が不明確。第2章は、今後の方針を含めるか課題の提示にとどめるかで書き方が変わってくる。山口委員のご意見は、第2章に方針を含めたもの。各章の役割を整理しておかないと、第2章と第3章の両方で同じことが書かれたり、また、第2章で提示されたものが第3章で無視されたりというような、構成の問題が生じてしまう。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・第2章のタイトルは、「問題点」とせず「課題」とした。問題点であれば、地域経済の「活性化」ではなく、「悪化」や「低迷」といったマイナスイメージの言葉になる。
- ・第3章で取組について述べる前段階として、第2章では文化振興によって解決が見込める課題をピックアップした。極端な例だが、医療体制の強化は小田原市の課題ではあるが、文化振興による解決は難しいので、ここでは挙げていない。第2章で文化振興により効果が望める課題があることを説明しないと、第3章が唐突な印象になってしまう。

【石塚委員長】

- ・章立てを整理すると、第1章は文化や文化振興についての説明。第2章は第1章を踏まえた現状認識で、それに対する対策が第3章となる。

- ・課題がなければ対策も出てこないのでは、第2章は課題と位置付けたほうがすっきりするのではないか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・現状の中に問題があり、問題から課題ができ、その課題に対して解決策を考えていくという流れ。第2章で課題まで取り上げ、文化がどのようにその課題に関わっていくかという説明がないと分かりづらいのではないか。

【平井委員】

- ・前回、桧森委員もおっしゃっていたことだが、強みと弱みを整理し、そこから何ができるかを検討するSWOT分析という手法があり、会社経営上の意思決定などに用いられている。ネガティブな要素を克服するだけでなく、自分達が持っているポジティブな面を伸ばしていくことも大事。項目ごとに強みと弱みの洗い出しができれば、次の取組への展開が見えてくるのではないか。

【杉崎委員】

- ・文化振興ビジョンは、策定したら市民にも配付するのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・市民個人や各家庭に一冊ずつ配付することは考えていないが、市民に対しては、他の計画と同様に、市ホームページや関係施設で閲覧できるようにする。

【杉崎委員】

- ・地域の方々、例えば自治会にはどのように知らせるのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・自治会連合会会長会議で一冊ずつお渡しすることはできるが、先日、別件で資料を配付した際には、自治会長全員に配付してほしいというご意見をいただいた。具体的にはまだ決めていない。

【杉崎委員】

- ・承知した。

【神馬委員】

- ・9ページの「課題に対する取り組みは、免疫療法や漢方薬のようにじわじわと効いてくるもので、全体の免疫力を高めることで様々な問題に対処できるようになります。」という部分だが、免疫とか漢方薬とかいう表現ではよく分からないので、ストレートに「課題に対する取り組みは、すぐに効果が出るものではない。」としたほうが分かりやすいのではないか。

【石塚委員長】

- ・この部分は、削除してしまっても全体的な意味としては変わらない。

【大森委員】

- ・「小田原の宝」の「山、里、海、川」を「森、里、川、海」に変えていただきたい。

無尽蔵プロジェクト「環境（エコ）シティ」で「森里海連環」という事業を実施しようとしており、杉崎委員がおっしゃったとおり、これら全てが揃っていることを小田原の強みとしたい。

【間瀬副委員長】

- ・森から海へと、実際の流れと同じになっている。

【大森委員】

- ・そのとおり。

【石塚委員長】

- ・「地域経済の活性化」の経済状況の記述についてだが、回復の可能性があるのか否か、事務局の認識としてはどちらか。

【杉本文化政策係長】

- ・回復の見通しはなく、今後ますます厳しくなるという認識である。

【石塚委員長】

- ・そのような認識であることも入れていただきたい。
- ・平井委員が指摘されたように、項目ごとに強みと弱みを整理し、対策につなげていけるように修正をお願いしたい。

【諸星文化部長】

- ・神馬委員が指摘された免疫力の記載については、桧森委員のご発言を基に取り入れさせていただいたものである。特効薬ではないということよりも、むしろ、文化力によるまちの体質改善と理解している。
- ・「地域コミュニティの再生」に関しては、厚生文教常任委員会でビジョン策定の進捗状況を報告させていただいた際に、今村議員から期待を込めたご発言があったことをお伝えしておく。
- ・第2章の課題に対して第3章で受け答えできているかは、文として通読すると分かりづらいかもしれないので、文章の書き方や言葉の使い方により、改善していきたい。体系図によって対応関係が分かるように組み立てているので、あわせてご覧いただきたい。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・ご指摘いただいていた課題と対策との関係図について、事務局内部で作業を試みたが、一対一にならず非常に煩雑になったため、ビジョン本文に掲載する資料としては採用しなかったことをご承知いただきたい。

【石塚委員長】

- ・第2章については以上とし、第3章に移ることとする。

【鬼木委員】

- ・第3章の役割を明確にするため、課題や必要とされていることを書くのではなく、

「～をします」という表現に統一を。「～が必要です」や「～が大切です」を、「～を保ちます」、「～を設けます」、「～に取り組みます」、「～を進めます」というように言い換えていく。

- ・「はじめに」から主語を「私たち」としてきているので、第3章の表現もこれに合わせて、「私たちは～」とする。

【平井委員】

- ・鬼木委員の意見に賛成。何をするのかをできるだけ具体的にすべき。
- ・先程、古矢文化芸術担当課長が課題と対策を関連づけると複雑になってしまうとおっしゃったが、課題に対して対策があると考えるのが通常の筋立てではないか。課題とは別に目標や方向性があるので、後からくっつけようとする関連が複雑になってしまう。

【石塚委員長】

- ・第1章で「人」と「まち」の2つの柱が設定されており、「こういうまちにする」という目標という意味で、第3章「1. 基本目標」に挙げた3つの項目と重複している。両方に出てきているので、つながりが分からなくなるのではないか。

【平井委員】

- ・逆に言えば、第1章で示された2つの柱を、第3章で基本目標として再確認し、その下に具体的な課題解決の方向性として3つの基本目標がぶら下がるようにすれば良いのではないか。素案では、3つの基本目標がいきなり提示されてしまっている感じがする。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・第3章の基本目標は、市としての方向性を示すもの。小田原のまちが持つイメージとして認識していただきたいのが、この3つである。
- ・一方、第1章にある「コミュニティの絆」や「都市ブランド」は、文化振興によって目指すまちの姿であり、文化力が高められたあかつきには小田原がこのようなまちになるというイメージ。

【平井委員】

- ・「免疫療法」は抽象的な表現のためいろいろな解釈をされてしまうが、「体質改善」に言い換えることができる。
- ・資料2を見ると、《文化振興の柱》、《目標》、《方向性と取り組み》の各項目に抽象的なまとめの言葉が並んでいるのだが、相互に関係があるのかわからないのが曖昧なので、まとめの言葉は分散しないほうが良い。むしろ、具体的に何をして何を実現していくかが問われている。

【杉崎委員】

- ・そもそも、文化は誰のためのものなのか。商売をしている人は「文化では食べてい

けない」と言い、文化は自分とは無関係という認識である。文化は自分のすぐ近くにあり、自分のためになるものだと示すことはできないだろうか。

【石塚委員長】

- ・まずは第1章の柱と第3章の基本目標との関係について考えたい。このままとするのか、重複している部分を整理するのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・基本目標を削除すれば骨組みとしてはシンプルになると思うが、基本目標で述べている考え方を小田原の特色としたい。第3章から基本目標を削除し、第1章の「3. 文化振興ビジョンは何を目指すのか」に、小田原市の方向性として何を指すかを盛り込めば良いのだろうか。

【石塚委員長】

- ・13～14ページの表現が中心となるように5～6ページをまとめ直すということか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・基本目標は、これまでの会議を経て、小田原市としてはこのような目標を持つべきなのだろうと考え、委員の皆さんのご発言の中から言葉を抽出して記述したものである。基本目標を第1章に溶け込ませることに了承いただけるのなら、そのように修正する。

【鬼木委員】

- ・5～6ページで書かれているのは、ビジョンとして目指すまちの基本的な考え方。一方、13～14ページでは、これからの取組にあたって共有すべき考え方として、小田原がどのような文化を目指すのかを書こうとしている。「基本目標」という言い方ではなく、「共有する価値観」や「目指す文化の姿」としても良いのでは。

【平井委員】

- ・資料2で言うと、課題と目標の順序を変え、似たものを近くに並べれば矢印が自然につながると思われる。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・基本目標の考え方に関してはいかがか。

【石塚委員長】

- ・13～14ページの3つの基本目標が、これで良いかということか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・皆さんのご意見では、この部分を全て削除してしまって良いというようにも聞こえる。小田原の都市ブランドのイメージといて持ってもらえるものという意味では、重要な部分かとは思いますが。

【石塚委員長】

- ・事務局からの問題提起に対して、意見を伺いたい。

【鬼木委員】

- ・ビジョンは将来変わっていく可能性があり、そのときに残るのは対策や施策ではなく、そこから生み出されていく文化そのものである。ビジョンで全ての課題を洗い出し、全てのやるべきことを決めてしまえるわけではないので、基本目標として記載した部分は、ビジョンにより何を指すのかを皆で共有できる同意事項として残しておきたい。

【諸星文化部長】

- ・平井委員が指摘されたとおり、課題を解決するための目標がこの3つというのではつながりが見えにくい。しかし、今の鬼木委員のご発言を聞き、3つの基本目標は、8ページに記載したような小田原の特性をどう捉え、どう伸ばしていくかの目標として、鬼木委員がおっしゃったような取扱いで本文中に入れていくことができるのではないかと感じた。

【石塚委員長】

- ・これまでの議論を集約すると、基本目標の内容そのものに関しては、異論はない。
- ・基本目標の記載位置については、第3章の冒頭とするか、第1章の「3. 文化振興ビジョンは何を指すのか」に含めるのかのいずれかとなる。第3章で改めて基本目標が出てくるのは理解しにくいという考え方と、それを承知で第3章に記載するという考え方がある。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・基本目標の部分については、理念として活かしつつ記載位置を変えようと思う。

【石塚委員長】

- ・第3章の冒頭とするのか、第1章の最後にするのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・第1章では文化全体について述べており、第2章から小田原の文化についての記述となる。基本目標は小田原の文化の特色を述べたものなので、第2章に記載しても良いのではないかな。

【石塚委員長】

- ・どの章に入れるかは、ここで決めておく必要がある。この場で委員の皆さんの承認を得て、はっきりさせておかななくてはならない。

【平井委員】

- ・第1章の「3.」で示しているものこそが基本目標であり、それをどのように達成するかを考えるのが第2章。第3章の冒頭で書かれるべきことは、絆社会と都市ブランドのために小田原の強みと弱みの両方を視野に入れて取り組むということであり、ここは新しい記述を展開する場ではない。

【神馬委員】

・第3章は取組だけということになるのか。

【平井委員】

・第3章の「1.」に書くのは基本目標の項目名だけとし、小田原の宝の活用と問題点の改善により達成を目指すということを簡潔に述べたうえで、次の具体的な施策や取組へと進めていく。

【古矢文化芸術担当課長】

・具体的には、13～14 ページをどこに移せば良いのか。

【平井委員】

・13～14 ページは、7つの小田原の宝をまとめたものとなる。

【古矢文化芸術担当課長】

・第2章に3つの基本目標を入れるということか。

【平井委員】

・第2章「1.」で伸ばすべき要素を確認したうえで、それらをまとめたものとして「2.」に書く。第3章は、第1章「3.」と第2章「1.」「2.」を受けて目標を示し、具体的に次の施策を展開します、という流れとする。

【古矢文化芸術担当課長】

・第3章は、ほぼ「2. 施策の方向性と取り組み」から始まるようなイメージか。

【平井委員】

・そのとおり。

【石塚委員長】

・鬼木委員はいかがか。

【鬼木委員】

・13～14 ページの記載が、小田原の良さとして一般的に認識されているものであれば、それで良いと思う。

【間瀬副委員長】

・最初から5 ページまでは文化全体の話だが、「3.」からは小田原の話になるので、小田原の宝も13～14 ページの内容もここに集約して良いと思う。最初に小田原はこういうものを目指したいと宣言し、それから課題を挙げ、具体的な取組を整理したほうが、流れとして分かりやすいのではないか。

【石塚委員長】

・間瀬副委員長のおっしゃるとおりの整理で良いか。

【山口委員】

・第1章が長くなってしまいがすが、集約することで第1章の「3.」が安定し、内容的にも充実するので、まとめ方としては良い。

(石塚委員長からその他の委員に順次確認、了承)

【石塚委員長】

- ・それでは、そのように整理することとする。

【平井委員】

- ・最初の章が長すぎるというのはどうかと思うのだが。

【間瀬副委員長】

- ・小田原の文化はこうであると言い切ってしまうと良い。長く説明する必要はない。

【平井委員】

- ・問題意識があるためだと思うのだが、全体的に留保表現が多い。「～なのだが、～します」は、「～します」に。削れるところは削り、ストレートな表現にすれば短くまとめることができる。

【石塚委員長】

- ・第1章だけでも、1ページ半くらいは短くなりそうだ。

【間瀬副委員長】

- ・事務局としてはいろいろな説明をしたいのと思うが、そこは用語解説などで補っていただき、本文はなるべくクリアにしていったほうが良い。

【石塚委員長】

- ・第3章「2. 施策の方向性と取り組み」以降についてはどうか。時間の関係もあるので、第4章も含めてご意見を伺いたい。

【大森委員】

- ・16ページの事業例「既存文化施設の再整備」についてだが、今存在している施設のみを対象とするのか、それとも新たに博物館等を建てるのか。市民の中には歴史博物館を造ろうという動きもあり、私自身は造りたいと考えている。再整備の意味には、それらも含まれるのか。
- ・「(2) ア 小田原を知る」の事業例に、「小田原城の歴史を学ぶ事業」を入れてほしい。小田原の人も観光客も、「小田原と言えば小田原城」、「小田原城を中心としたまちづくり」と言うが、実際には小田原城について詳しく知らない人が圧倒的に多い。八幡山古郭、大外郭、一夜城といった小田原の宝がたくさんあり、小田原を知るといことは、まずこれらを知ることから始まるのではないか。城というと文化財課や観光課の仕事だと言われてしまいそうだが、演劇、まちあるき、市民ホール完成時の講演会などの文化事業として、推進体制の目玉でもある行政の横のつながりを築くモデルプランとしてほしい。
- ・「(3) ア 地域資産を生かす」に、「森づくりや里山の保全を市民総ぐるみで進めていきます。」と記載いただいたことはありがたいが、森、里、川、海の全てが揃っていることが小田原最大の強みであり、これらをつなげることでより強固なものとなっていくのだと思う。「森里海連環事業を市民総ぐるみで」「森、里、川、

海を一つにつなげて再生する」といった表現に変えてほしい。

【露木委員】

- ・「(4) ア 小田原の文化を演出する」について、ものづくりの立場から。情報について記載されているが、新しいものや素材的におもしろいものができるも、広がっていかねば文化として発展しない。単に情報を発信するだけでなく、情報の見せ方を演出できるコーディネイターやプロデューサーが必要。文中に「発信の仕方を含めたトータル演出ができる人」という表現があると良い。

【杉崎委員】

- ・大森委員に賛成。小田原の顔が見えるものが必要。また、小田原ブランドを謳うのであれば、商品的価値があるものも求められると思う。
- ・無尽蔵プロジェクト「市民による芸術文化創造」では「まちなか美術館」を開催しており、今後は市民ホール基本計画策定専門委員会の桑谷先生にもご協力いただく。このような事業も入れてほしい。

【鬼木委員】

- ・15 ページの「現在、進められている市民ホールの整備はもちろん」は、表現が軽すぎないか。市民ホールは小田原の文化振興の中核となるべきものだが、この表現では文化活動の環境の一つと捉えられてしまう。単なる場の提供ではなく、一つの組織体として、市民ホール自体が文化創造の場であることを示したい。

【平井委員】

- ・現在、清閑亭で行っている事業は、文化を消費して観光するのではなく、文化を守り継承していくために観光に活用するという視点に基づいている。文化による経済活動の活性化と、経済活動による文化の継承という、双方の視点が必要。
- ・「(4) イ 交流を拓げる」の「小田原の文化を体感できるような観光を創出していく必要があります。」の部分に、「経済観光」という言葉を入れてほしい。地域経済振興戦略ビジョンでも用いているので、共通の目標となる。
- ・行政に関することは、第4章の推進体制に入るのか。

【石塚委員長】

- ・推進体制については、事務局から説明いただきたい。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・いろいろなところから人が集まるプラットフォーム型として、「小田原文化評定」という言葉により、ある程度は認識が共有されてきたと感じている。来年度すぐに「小田原文化評定」を募集するというわけにはいかないが、そこで何をしていくかも含めて、熱意のある市民の方々を交えて議論を行っていきたい。この委員会で示された方向性を基に議論を重ねることになるので、第4章のタイトルに「策定検討委員会からの提言」を加えさせていただいた。

【平井委員】

- ・第4章の考え方については、承知した。
- ・課題となっている「行政の文化に対する取り組み」について、第4章にある「関係課等にビジョン推進担当を配置」も一つの方法だとは思いますが、例えば公共施設を民間が運営するなど、民間の力を使って市が持っているものをブラッシュアップしていくことも大事。
- ・財政難の折、行政だけでなく市民総ぐるみで取り組んでいくことを文化振興の柱とすべき。市民ホール基本計画ではすでに実践されていることだが、素案からは協働の視点が抜けてしまっている。

【鬼木委員】

- ・第4章では、ビジョンは市民が自ら推進するものであることを強調すべき。読み方を間違えると、市長がやるものと捉えられてしまうのではないかと危惧しており、「私たちは」という主語を入れるよう主張してきたのはそのような趣旨からである。市民も行政も一緒にビジョンを実現していくというスタンスが、第4章からも分かるようにしたい。

【石塚委員長】

- ・私個人の意見だが、情報発信に関しては、マスコミを上手に使うことで小田原に客を呼ぶという能動的な動きも考えなくてはならない。地元の体制を整えるだけでなく、外の人を取り込む活動も必要。
- ・例えば、女性誌とタイアップして、小田原のまちで優雅にお茶が飲めるという特集を組んでもらう。また、小田原駅東西自由通路は様々な人が通るので、情報ビジョンをより大きなものにして小田原市内の魅力あるものを常に発信すれば、そのときは通りかかるだけでも、次は小田原に来てみようというきっかけになる可能性がある。そのようなことも情報発信の一部としていきたい。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・石塚委員長のご指摘を踏まえて、「都市セールス」という言葉をどこかに追加しようと考えている。

【大森委員】

- ・ビジョンは一度策定したらずっとそのままとするのではなく、3年ごとなど定期的に見直しを行う更新型にすべき。時代も人の価値観も変わっていく中で、ビジョンだけが10年も20年も変わらなくて良いのだろうか、その都度時代に合わせて変わっていくビジョンでも良いのではないだろうかと感じている。手続上、ビジョン自体を変えるのが難しいのであれば、推進体制の中で議論して対応できると良い。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・ビジョンは総合計画に基づいて策定するものなので、総合計画の見直しに合わせて

ビジョンも振り返りを行うこととなる。

【平井委員】

- ・第3章の「2. 施策の方向性と取り組み」において、本文と「実践していく事業例」との関係は。本文に記載のあるものは事業例とはならないのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・厳密な区別はない。

【平井委員】

- ・「(3) ア 地域資産を生かす」の事業例に、邸園文化を活かした様々な活動として「邸園交流」を入れてほしい。
- ・「(2) ア 小田原を知る」の事業例に、「近代小田原三茶人の顕彰」を入れた意図は。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・小田原の象徴的なものではないかと考えている。先程、大森委員から小田原の象徴は小田原城というご意見をいただいたが、小田原の別の側面を引き出すものとして挙げさせていただいた。また、事業例が講座ばかりに偏らないよう、様々な展開し得るものを入れたいという意図もある。

【平井委員】

- ・小田原市は北原白秋の顕彰にも力を入れている。大切にすべきものとして、「近代の有力者や文化人」というように幅を広げつつ、例として北原白秋や三茶人を挙げるのが良いのでは。
- ・本文の「小田原の素材をよく知ることで、新たな展開へのヒントが生まれます。」とはどういうことか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・「(3) ア 地域資産を生かす」につながってくるもので、地域資産を生かしていくためには、どういうものがあるかを知る必要がある。第3章「2.」は、考え方としては(1)、(2)、(3)、(4)と段階を踏んでいる。

【平井委員】

- ・それならば、「小田原の地域資産をよく知ることで、活用の方向性が見えてきます。」としてはどうか。「小田原の素材」という表現ではよく分からない。

【神馬委員】

- ・「(2) イ 文化の担い手を育てる」に「育成のためには、専門的な知識を有する人材が必要とされています。」とあるが、事業例にはこれに該当するものがない。専門家については、育てることを想定しているのか、それとも他から呼んでくることを想定しているのか。

【古矢文化芸術担当課長】

- ・事業例として挙げているアートマネジメント講座や学校へのアウトリーチを実施す

る際には、手近な人で間に合わせるのではなく、専門家を呼ぶということ。

【石塚委員長】

・素案については、以上として良いか。

(委員発言なし)

【石塚委員長】

・その他の資料について、何かあれば伺いたい。

【神馬委員】

・資料5の「多様な文化を個性とするまち」は、「多様な文化が調和するまち」をこのように変えたということか。

【古矢文化芸術担当課長】

・そのとおり。事務局内部で「調和」という言葉では弱いという意見があったため、「個性」に変えさせていただいた。

【石塚委員長】

・本日の議論を踏まえてもう一度素案を整理すると、かなり大幅な修正になると思われるが、今後はどのようにしていくのが良いか。

【杉崎委員】

・修正したものは、委員に見せていただけるのか。

【古矢文化芸術担当課長】

・本日いただいたご意見を基に修正し、案としてできあがった段階で委員の皆さんに再度お示しするので、メール等にてご意見をいただければと思っている。

【石塚委員長】

・それでは、今後については、事務局で整理していただき、私と間瀬副委員長とである程度詰めさせていただいたうえで、皆さんからのご意見をお伺いして、最終的に事務局と調整しながら委員会としての成案をまとめていくという段取りとして良いか。

(委員了承)

(2) その他

【石塚委員長】

・今回が最後の会議となるので、各委員から感想等をお話しいただきたい。

【杉崎委員】

・宣伝になってしまうが、市民の取組としての「まちなか美術館」にぜひお越しいただきたい。今後も皆さんと一緒に小田原の文化を推進していきたい。

【神馬委員】

・知識不足を痛感した。小田原には良い地域資産がたくさんあるので、活かしていけ

るシステムができると良い。これからも、市民の一人として何ができるか考えていきたい。

【鬼木委員】

- ・たいへん勉強になった。小田原は横浜と驚くほど似ている。引き続き、何らかの形で関わらせていただくことができればありがたい。

【大森委員】

- ・一般市民としての立場だったため力になれたかは分からないが、委員会に参加できたことに感謝している。

【岩城委員】

- ・当初、文化はビジョンとして冊子を作らなければ振興できないものなのかと疑問に感じていたが、会議を終えて、やはり冊子にする必要があるのだと思った。

【露木委員】

- ・このような会議は初めてで分からないことばかりだったが、ものづくりを産業ではなく文化として捉えていただき、ビジョン策定に関われたことは、自分にとって良い経験になったし、また新たな道が開けるのではないかと感じた。

【平井委員】

- ・委員長をはじめ、委員の皆さんから勉強をさせていただいた。会議会場として清閑亭を使用していただき感謝している。清閑亭は、多くの方々のアイディアでさらに良くなっていくと思うので、引き続きご協力いただければと思う。

【山口委員】

- ・議論の時間が足りなかったと感じている。委員の中で唯一の行政の立場であり、申し上げにくいこともあったが、本日議論のあった推進体制については、自身の立場から関わっていきたい。

【間瀬副委員長】

- ・短い時間でよくここまでまとまったと思う。これから重要になるのは第4章の推進体制であり、どのように推進し、どのように評価していくかが大きな課題となる。ビジョンがただの本になってしまえば、これまでの議論が無駄になってしまう。策定に関わられた皆さんには、緊張感を持って育成を見守っていただきたい。

【石塚委員長】

- ・委員の皆さんのご協力に感謝する。しかし、山で言えばまだ7合目であり、再度事務局と詰めて成案を目指すので、また皆さんから率直なご意見をいただきたい。
- ・日本の政治においても、意思決定ができない状況にある。今求められているのは、他者を頼らず自立していくこと。文化の力でまちを活性化することで、人が集まってくるという循環ができると良い。難しいことだが、小田原はそのようなまちであってほしい。

- ・最後に、事務局からも一言いただきたい。

【奥津文化部副部長】

- ・部長の諸星が公務の都合で退席したため、代わりにごあいさつ申し上げる。
- ・短い時間でまとめていただき感謝している。石塚委員長がおっしゃったように、これからビジョンを策定し、活かしていくまでには、まだ長い道のりとなる。文化行政においては、計画ができた後も、事業として推進するためには様々な方の協力が必要となる。委員の皆さんには、策定に関わっていただいたことをきっかけに、ぜひ今後ともお力添えをいただきたいと思っている。

【石塚委員長】

- ・以上をもって第5回会議を終了する。